

味細胞のアンテナ 変化を解明

味の評価システム開発に一歩

岡山大や理化学研究所放射光科学総合研究センター（兵庫県佐用町）などは、うまみや甘みを感じる時、味細胞のアンテナにどんな変化が起きているのかを解明した。味を客観的に評価するシステム開発へつながると研究グループは期待している。人を含む脊椎動物の舌などに

ある味細胞の表面には、味物質を認識するアンテナ役の受容体が突き出ている。ただ受容体を培養細胞で大量に作るのは極めて難しく、構造や振る舞いはよく分かっていなかった。

岡山大の山下敦子教授らは、昆虫の培養細胞を使うことで、メダカの味の受容体の大量培養

岡山大など研究グループ

と精製に成功した。味物質がない時は広がっているアンテナ部分が、味物質が結びつくときすばまり、細胞内にその情報を伝えていることが分かった。

山下教授は「メダカでの成功で、形や仕組みがよく似ている人間の味の受容体の培養への手がかりが得られた。成功すれば人が感じる味を客観的に評価するシステムができる」と話す。

英電子科学誌サイエンスイックリポーツに掲載された。

（中村通子）